



スペイン語へのいざない

(2003年3月東京大学新聞に掲載されたものです)

網野徹哉 (スペイン語部会／ラテンアメリカ史)

「第二外国語案内—スペイン語」

現在スペイン語は世界二〇カ国で、三億五千万の人々が話しているという。この状況に至るまでには、長い歴史があった。一五世紀末、スペインの言語学者ネブリーハは「言語は帝国の伴侶である」と高らかに謳ったが、この言葉にあと押しされるように、征服者たちは新大陸の各地へ乱暴にスペイン語を散種していった。メキシコの荒野に、カリブの浜辺に、アンデス山脈の谷間に、そしてアルゼンチンの大平原に蒔かれたこの言葉は、その多様な滋養を受け取りながら成長した。やがて「帝国の伴侶」であることをやめ、それぞれの道を歩み始めてゆく。カリブでは、アフリカの言葉のリズムを学び、まろやかな官能的なスペイン語へ、アンデスではインディオの言葉と混じりあい、哀愁を湛えた骨太のスペイン語へ、アルゼンチンではイタリア移民の言葉と融けあって、歌うようなスペイン語へと育てていった。そしていまや「英語帝国主義」という言葉をあざ笑うかのように、サルサのリズムにのり、あるいはメキシコ料理の辛い風味をただよわせて、北米の街角を飛び跳ねている。それにラテンアメリカに育ったサッカー選手たちが、その目を睨む身体能力とスペイン語を靴に詰め、世界各地で人々に喜びを与えていることも私たちはよく知っている。

この多様性に貫かれた言語と、私たちは駒場で出会うことができる。ラテンアメリカに生きる人々と同様、この言葉はじつに人懐っこい感じがする。発音はかなりやさしい。一学期の最初の授業で発音の仕方を学ぶと、次の授業ではガルシア・マルケスの小説でも、『ドン・キホーテ』でも、朗読することが可能だ。動詞の活用は覚えなければいけないけれど、ずいぶん規則的だからそれほど苦勞せずすむ。初級の文法を終えてしまえば、スペイン語を旅券がわりに、バスに乗って南北アメリカ大陸縦断をすることだってけっして夢ではない。もちろんスペインに出かけてもよい。たとえばアンダルシア。テンポが速く、ジプシーやいにしへのイスラム教徒の息遣いをのこすスペイン語が、熱い太陽のもとシャワーのように降り注いでくるだろう。

¡Bienvenido! 《ビエンベニード！ようこそ！》

この目眩く世界への扉が、まもなく皆さんの前に開かれる。